

限られた授業時間を

生かす指導の工夫

大阪教育大学名誉教授

中西 一弘
なかにし かずひろ



時間数が大幅に削減されて、指導にゆとりのなくなったことが、大きな問題になっている。わずかな時間で、効果的な指導計画を立てなくてはならない。ここでは一例を示して、実践家の皆様の更なる工夫をお願いしたい。

教育の本質は、もう何千年以来、はつきりしている。学習者に知識や技能を注入することはできない。学習者のもっている力を引き出すだけだ。「教育」とは、語源では、そのような意味を表す語である。

それに、近代百年の初等教育の実践から、「話す・聞く・書く・読む」の三(四)領域の活動が無理なく有機的に結び付いた授業こそ、国語の力をもっとも効果的に育成していくものだ確認されている。

以上の考えに従えば、関連た、生きる力だ、伝え合いだという時流に対応するにも、学習者の表現(書く・話す)活動がわずかずつでも毎時間なくてはならない。それがなければ、学習者から何を引き出せばよいか、何を助言・支援すればよいか、見当がつかないからである。

それに、国語科の教材は日本語である。その日本語は、読む場合と書く場合とで、異なる言語ではない。レベルの違いはあるにせよ、同じ日本語である。読む教材から書く題材はむろんのこと、書き方の手法が学べることはいつまでもない。そのように発展していかない「読み」の活動は、はたして十分な「読み」を指導しているのかという疑問さえいだかせる。

「このような観点に立つて、無理なく」話す・聞く・書く、読む「ことのできる授業の一例を提示してみた。わずかもいい、読んでいる最中に書いておくと、その教材の読みが終了するや否や、一、二時間で原稿用紙何枚もの作文に仕上がる。

学習の記録文と報告書、学習を伝える手紙、学習指示・豆知識「ラムなどの学級新聞等々、多種多様な書く作業が、読む学習と一体化することで、題材と取材の段階を飛び越えて、構想と記述に入り、短時間でできあがる。

二年下 ― よつすを考えて読もう「お手紙」

主な学習事項

- 「お手紙」がすらすらと読めて、楽しく感想をもつことができる。その結果、他のお話を読む意欲を育てる。(読ウ)
- (読ウ)
- 語や文のまとまりに注意し、声の大きさなどを考えながら読む。(読ウ)
- 挿絵も参考にしながら、人物の気持ちや動作を読む。読み取ったものをプリントに書く。(読ウ・書イ)

【言語活動例】

自分のもった感想を人前でしっかりととした声で発表する。(話聞ア) 紙人形劇にできるように、台本の形式に書き換え、発表する。(話聞ア・書工)

友達のと紙人形劇の楽しかったところを知らせるお手紙を書く。その返事をもらう。(書ア)

学習活動(指導のポイント)

- 挿絵を初めから順に見ていくだけで、登場人物、ことごと(お手紙)場所がわかる。これで「あらすじ」「もほどなど予想できる。他の本にも活用できる観点であることを指示しておく。
- くり返し音読しながら、各場面の様子を話し合う。
 - 場面ごと「おもしろいな」「好きだな」「とつなるのかな」「ここを読みたい。」など、読み手に強く印象を与えた部分(一文か二文)をプリントに記入する。(教科書の本文に傍線を引かせてから、その部分を視写させてもよい。)
 - それに、一語程度の感想も加えさせる。吹き出しで自由に表現させるのもよい。
- 全員の記入を見届けて、順次、発表させる。
 - 全員の指摘した文を展開に即して印をつけていくと、重要な文はすべて取り上げていることがわかる。
 - 全員の指摘を取り上げながら、読みの確認をしていく。指摘した理由や感想を発言させていくと、それだけでほぼ読みの学習はできあがる。多様な意見も出て、読みの広がりも期待できる。
- 本文の音読が一応できたところで、グループに分かれて、好きな場面を紙人形劇にするための台本作りする。グループの全員が、わずかも一人で分担する部分ができるように役割を用意する。
- 友達のと紙人形劇を見て、発表のよい点を手紙に書いて知らせる。もらった人も、友達のと発表を見て、返事を書く。
- 表紙や挿絵を見せながら、あらすじ(おもしろさ)を紹介する。

主な学習事項

体には、いくつもの仕組みがあつて、さまざまなものの攻撃から体を守っていることを読み取る。(読イ)
 説明文の読み取りに欠かせない、段落とキーワードなどに注目する。(読オ)
 (読オ)

科学的な説明文に興味をもって取り組めるように、「読み取ったことを発表する」という動機づけをして、主体的な学習を展開する。(読ア・話聞ア)

説明文を正確に読み取るために、記述項目を整理しておき、発表学習の台本に活用する。(書アイ)

教材の読み取りの学習と並行して、関係する資料を読んだり聞いたりして、体の仕組みに関する知識を集める。(話聞イ・書イ・読アオ)

分担して得た知識を発表して、「体」事典に仕上げる。(話聞ウ・書エ)

学習活動(指導のポイント)

- 1 風邪をひいたときの体験を話し合う。それだけで、いつもと異なる体の調子が判明する。
- 2 「わたしの体」という絵を描いて、自分の体(外見)の特徴を短い言葉で表す。欠点の指摘に陥らないように留意する。
- 3 「体を守る仕組み」を読む。説明文を正確に読む観点を学ぶ。
 ・タイトルから「体を守る仕組み」の三語が最重要のキーワードだとわかる。そこから、「守る 攻める」なども。
- 4 同じ段落で二回以上くり返される言葉もキーワードになる。
 ・説明される方向を見定めるために、最初の数段落をゆっくり注意しながら読む。(微生物から自分を守る仕組みが、体にある。その仕組みをこれから説明していくのだなと予想ができるようにしておく。この際にも、キーワード発見をさせておく。)
- 5 短い段落に注目する。(具体的な内容よりも、これから述べていく文章の方向を示すが、短い段落の役目である。段落のまとまりを早く見当をつけるのに役立つ。)
- 6 段落の最初の文・キーワードに注目して、段落の内容をとらえる。
 ・発表をする。教材文の正確な読みを進め、新知識を得る。
 「わかったこと」「調べたいこと」の順で、文章内容を読み進めながら記入していく。事典風にまとめておくのもよい。
- 5 記入したものをもちに、「ひび」や「なみだ」や「せんもう」などに分かれて分担して発表する。「調べてわかったこと」も加味して、台本を作って用意しておく。

主な学習事項

「海」の命を読んで、さまざまな命と生き方を認めることができる。(海ア)

「山」で、都会で(生きるとは)とは、どういふことを意味するのか。この問題をみんなで考える。(読ウ・書イウ)

タイトルを読んで書く。(読オ・書イ)

読む前と読んでから考えた「海」の命。その相違点(読ア)

作品全体をとらえる。(読イ)

書きだしの一段落と最後の一段落とを比べる。初めと終わりで大枠をとらえる。(読イ)

人物をグループで調べる。(読ウ)

主人公の成長ぶり・父の死の様子・与吉じいさの教え・母の嘆きと、その役割・クエとの対面と争い。グループごとに発表する。(話聞ウ)

発表をしたり聞いたりしたことに基ついて学習記録、または感想文を書く。(書イウ)

学習活動(指導のポイント)

- 1 本文を読む前に、タイトルの「海」から、作者はどのよつた「命」のことを書いているか、予想させる。予想をもち、それと自分の読みを比べるという主体的な姿勢をつくって、初読にとりかかる。短く、「二行程度の予想を書き記しておく。
- 2 初読して、作者が述べていること(あらすじ)がわかってから、作者の考えている「海」の命とは何か、また、自分の読み取りを、予想と比べながら書く。(読みの前後の考えを書くので、やや詳しく書けるだろう。)
- 3 作品の骨組みを理解するために、冒頭部と結末部との比較をしておく。山場での人物の変容を理解するために、両者の反復語彙に注目して、気づきを書き出す。
- 4 グループごとに分担する登場人物を決め、人物の特徴をとらえる。(特徴を三箇所を視写して、そこからわかる特徴を書く。)
- 5 それだけで、筋の変化がつかめるので、会話文だけを見ていくグループも作る。
- 5 分担事項を報告する。各グループとも、根拠となる本文(の部分)を引用しながら(プリントに示しながら)、そこから引き出した自分たちの気づきを書く。
- 6 分担部分の調査・報告の結果をレポートにまとめる。